

Title	古代ニ於ケル齒科醫術
Author(s)	野口, 英世
Journal	齒科学報, 6(3): 1-5
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/439">http://hdl.handle.net/10130/439</a>
Right	

齒科學報

第六卷第三號

明治三十四年三月發行

論

說

古代ニ於ケル齒科醫術

野口英世

太古ノコトハ混沌トシテ攷フベカラストシ神代ニハ下界人類ニ仇スル病魔ノ如キハ絶テナク四海波  
穩カニ諸々ノ苦シミハ更ニナキモノト如ク想フハ年經シ痕ハ其痛ミヲ忘ルト同シク世又世代  
又代ヲ累ヌルニ隨テ苦痛ハ忘却セラル只當時ノ樂ミノミヲ追懷シテ上古ハ惡徒ナク病患ナカリシ如  
ク想フハ人性ノ弱點ニシテ憂シト見シ世ゾ今ハ戀シキ慣ヒナルヲ奈何セン左レバ人類ノ地球上ニ顯  
ハレシヨリ今日ニ到ルマデ智徳体育ノ上ニ於テ無量ノ變遷ヲ蒙リシコトハ勿論ナリト雖モ而カモ決  
シテ人類ノ摸型ヲ脱スルコトナカルベキハ近クハ今世紀ニ於ケル文明人ト野蠻種族トヲ較比スルト  
同一ノ感ナクンハアラス苟クモ人類ノ範圍ヲ脱セサル以上ハ理學的生活ハ或程度マデテ否食物原料

ノ點ヨリ必ス一致セサルベカラス唯文明ハ勞力ヲ省キ生活法ノ複雜ナルト同時ニ既存有害物ト身體諸器官ノ抗抵力トノ比例ヲ變ジ或種ノ病患ハ其侵襲力ヲ増進スルカ或ハ全然從前有害作用ヲ及ホシ能ハサルモノモ能ク其作用ヲ病的ナラシムルモノナキヲ保セサルナリ何レノ点ヨリ論スルモ營養器系統疾患ノ如キハ人智開發ノ如何ヲ問ハス人類ヲ侵セシ事實ハ爭フベカラサルモノアリ然リ然リト雖モ此病疾ヲ以テ神ノ崇トナシ或ハ惡魔ノ所爲トナセシ所謂人智混沌タル時代ニ於テハ病ノ治スベキモノタルヲ知ラス豫メ防クベキ術ヲ解セサルバ是ヲ天命ト心得マタ今日ノ如ク狼狽セサリシモノニシテ是又上古ハ太平無事ナリトノ想像ヲ描カシムル一因タラズンバアラズ其他記載的智識ノ欠乏ハ益以テ當時ノ出來事ヲ腦裡ヨリ抹殺シ恰モ繽紛タル六花降り止ミテ一眸萬象又一介ノ汚塵ヲ見ル能ハズ都鄙銀世界ニ變ズルト又何ゾ異ナランヤ然レ共種々ノ古跡遺物ト形象的記載史籍トヲ徵考シテ其概況ヲ追想スルハ頗ル至難ノ事ナリト雖モ亦タ不能ノ企テニアラスシセロ曰ク歴史ハ時代ヲ證明ス *Historia testis teuporum* ト實ニ歴史ハ時代ノ証據真理ノ炬光記憶ノ生命古代ノ音信者タルヲ失ハサルナリ人類ハ如何ナル時代ト雖モ死ト病トニ反抗スルハ爭フベカラサル所トシテ從テ齒牙疾病ニ對シテ古人ノ處置モナカルベカラサル理ニアラスヤ頃日以太利チアベル市ノ齒科醫 *Signor V. Incenzio Guerini* 氏ハ巴里萬國齒科醫會ニ於テ古代ノ齒科醫術ニ就テ演述セント企テシガ全國皇帝ノ喪中ヲ憚リテ果タサ、リキ余今全氏ノ原稿ヲ得タレハ其一部ヲ摘述シテ諸彥ノ一粲ニ供セントス

今日吾人ノ稱スル齒科醫術ハ軌近進歩セシ一科學タルコトハ言テ埃及スト雖モ人類ノ世ニ出テタル以上ハ齒牙モ亦現存ス齒牙現存スレハ從テ疾病アリ故ニ古代既ニ之ガ治療ヲ行ヒシ人ナカルベカラス醫術ニ關スル古書中有名ナルエベルス氏ノ蒐集セシ記錄ニハ齒病殊ニ疼痛ニ對スル處方四十餘ヲ下ラス而シテ此處方ハ耶蘇降誕前三千七百年以上ノモノニシテ是ヨリ五十六世紀以前ニ既齒科醫術ノ初步アリシコトヲ知ルベシ然ルニ齒科外科醫術ノ嚆矢ハイスクラビエス氏 Aesculapius ニシテ氏ハ初メテ拔牙術ヲ行ヘタリ其使用セシ鉗子ハデルフォオスノアポロノ寺ニ秘藏セラレアリソレヨリ降テ紀元前四百五十年頃ニ至リテ一般ニ醫術ノ思想モ發達シ中ニハ專門的分科モ生ジ眼科頭科胃科及齒科ナト現ハレタルコトハリカルナスス Halicarnassus ノハロドツース氏 Herodotus ノ記載ニヨリ明カナリ蓋シ齒科ノ專門ニ歸セシハ此時代即耶蘇紀元ヨリ五世紀以前ニアルモノ、如シ然レドモ如何ナル程度ナリシヤヲ知ルニ由ナシ

或人ハ義齒繼齒金充填等ノ形跡ヲ埃及木乃ノ中ニ發見セリト云フ者アレトモ充分ノ根據ナキ説ナリ埃及木乃ニ就テハエベルス Ebers エミール、シニハット Emilie Schmidt ウヰルヒエウ Virchow マムマー氏 Mummy 等ノ研究ナリシモ埃及人民ニハ義齒ヲ見當ラストセリ殊ニ帝王ノ木乃ニスラ之ヲ認メザリシ猶ダレッシー氏 Dansey ノギゼーニ於テ研究シ又カイロノドクトルフツケエー氏 Fournut ノ研究ニヨルモ陰性成績ナリシフツケエー氏ハ埃及人民ニ器械學的思想ノ發達セサル理由ナケレハ

多分法律上之ヲ禁シタルナラント謂ヒグリーニ<sup>一</sup>氏ハ飾屋連カ屍体ヨリ剝離セシナラント謂フモ何レ  
 モ妥當ナル臆度トナス能ハス埃及人民ハ宗教上ヨリ死人ヲ崇拜スルコト甚シキモノナレハ屍体ヲ辱  
 シムルコトナカルヘシ及其他種々ノ器械ニ金ノ鑲飾アレトモ其儘存在スルヲ見ルモ斯カル舉アルコ  
 トナキヲ斷スヘシ然レ共アフリカノ北岸ニシテ埃及ノ隣邦タルフェニシヤ人種ハ紀元前五世紀ニ於  
 テ既ニ齒科器械術ヲ實施セシ形跡アルヲ以テ見レハ埃及ニ義齒ナキハ實ニ一奇ナリグリーニ<sup>一</sup>氏ハ其  
 他紀元前四百年頃ノ遺物ト認ムヘキ義齒ヲ金銀ニテ隣接齒ニ連繋セシ者ヲ發見シ又エトルスカン墳  
 ニハ猶多數ノ義齒ヲ發見シタリ故ニ氏ハ少クモ二千五百年前既ニ架工術ノ實施セラレシヲ記セリ  
 羅馬人ハ義齒ヲ用ヒシコト頗ル古代ニシテ恐クハエトルシヤヨリ誘入セラレシモノナルヘシ紀元  
 四百五十年前ニ發布セラレシ十三條ノ法令中弛緩齒ヲ緊搏或ハ義齒ヲ嵌入スルヲ記セリソレヨリ  
 五十年以後ニ至リテヒボクラテス氏ハ齒牙及齒齦ノ疾患及療法ヲ詳記セリ且ツ氏ハ磨齒粉ハ腐敗性  
 ノ呼氣ノ口腔ニハ必要ナリトシ其處方トシテ大理石末ニ三疋ノ鼠ト一疋ノ兔トテ燒キシ灰ヲ  
 混シタルモノヲ推薦セリ勿論貴族ノ用フル處ナリシ然ルニ氏ハ器械學上ノ事項ヲ記セサリシモ是ヲ  
 以テ希臘人カ義齒及充填ヲ知ラサリシモノト見做ス能ハス  
 アリストートル時代ニ於テ(紀元前四百年頃)拔齒ハ普通行ハレタリ其鉗子ハ恰モ日本ノ銜子ノ如キ  
 モノニシテ一箇ノ支点ニ二箇ノ槓杆ヲ繋キシモノナリ夫ヨリ耶蘇紀元ニ近キ時代ニ至リコルネリユ

ース、セルスス氏 (Cornelius Celsus) ハ齒病及一普醫學ニ就キ進歩セル説ヲ出ダシ其疾患分類モ一層適當トナセリ且ツ氏ハ拔牙ハ最終手段ナリト主唱シ頻リニ保存的療法ヲ行ヒ拔牙ノ危険ナル場合及之ニ處スル方法心得等ヲ説ケリ故ニ耶蘇紀元ニ於ケル齒科醫術ハセルスス氏ニヨリテ一大進歩ヲナシタリト謂フヘシ

## 上顎竇に就て

在長崎 茅野柳次郎

上顎竇ニ關シ些カ諸書ニ散見シタル所ヲ綜合シ解剖的要點並ヒニ生理的要素ヲ陳述セン、

解剖的要點 本竇ノ名稱ハ

Sinus Maxillaris.

Maxillary Sinus.

Antrum.

Antrum of Highmore.

ハイモール氏竇

上顎竇